

だいじゅういっしょう 第十一章

にんじゃ しゅうげき 忍者の襲撃

いっぽう ねた ふか ろうば ちゃや にんじゃ あ
一方、ある妬み深い老婆の茶屋が忍者らに会いました。「あのよそから来た茶道家は、
きゃく よこど け ほ い
お客を横取りするんです！消して欲しいんです！」と言いました。

にんじゃ おさ てだ き
忍者の長は「そうですか。どんな手立てがいいでしょう？」と聞きました。

ちゃや てだ かま こた さ
茶屋は「どんな手立てでも構いません」と答えて、去りました。

おさ そつきん さどうか なに し き
長は側近に「あの茶道家について何か知っているか？」と聞きました。

そつきん すうしゅうかんまえ まち き おんせん はたら まいばん しろ い
側近は「数週間前、この町に来ました。温泉で働いています。そして毎晩、城に行
きます。若殿は彼女について興味があるそうです。隣にあった国の前の大名の娘
わかとの かのじょ きょうみ となり くに まえ だいまよう むすめ
かも知れないそうです」と答えました。

おもしろ となり くに だいまよう かのじょ きょうみ むすめ いま
「面白い。隣の国の大名も、彼女について興味があるかな。じゃ、娘を今からこ
つ だいまよう ししや はけん おさ い
こに連れてきて、大名に使者を派遣しろ」と長は言いました。

おさ おお とお そつきん い で
「はっ、長、仰せの通りにいたします」と側近は言って、出かけました。

よる おんせん かえ あいだ なんじゃ すばや と かこ さるくつわ
その夜、ゆきが温泉へ帰る間、忍者はゆきを素早く取り囲んで、猿轡をかませて、
てあし しば も あいだ け うでかざ き じめん お
手足を縛りました。揉みあっている間に、毛の腕飾りは切れて、地面に落ちてしま
いました。

そつきん おさ てあし しば つ い むすめ さどうか
側近はゆきを長のもとへ手足を縛ったまま連れて行きました。「この娘が茶道家
い
です」と言いました。

おさ わかほんとう じょうず むすめ ちゃ ゆ み そくばく
長は「そうか。若すぎるな。本当に上手かな。この娘の茶の湯を見てみたい。束縛
と い
を解いて」と言いました。

さるくつわ はず たす たす たす さけ きつね け
猿轡が外させてから、「助けて助けて助けて」とゆきは叫びましたが、狐の毛がな
いので、何事も起こりませんでした。
なにごと お

「この付近では、いくら叫んでも、誰も助けにはこない」と長は言いました。「一服
た
立ててくれ」

しかたなくゆきはお手前を始めました。終わった後で「本当に上手だぞ。大名の興味
がなければ、俺はお前を芸者にするつもりだ」と長は言いました。

「めっそもごさいません」とゆきは言いました。

「この娘を牢に連れて行って、そこに閉じ込めておけ」と長は言いました。

牢に閉じ込められてから、ゆきは泣きながら眠ってしまいました。

[Yuki no Monogatari](http://www.TheJapanesePage.com) by Richard VanHouten
<http://www.TheJapanesePage.com>